

環境の時代を考える

大阪信愛女学院短期大学助教授 足高 壱夫

本当の豊かな生活を手に入れるために、フェアトレードを通して、
途上国の生産者とともに日本の消費者もエンパワーメント

本学の経営母体である幼きイエズス修道会日本管区では数年前からカンボジアで支援活動をはじめている。学生たちも学園祭の収益金などを寄付したりして協力している。今年の学園祭では支援先のカンボジアの人たちの作ったモノを販売する計画があるようだ。これは、「お買い物で国際協力」といったキャッチフレーズで紹介されるフェアトレードという方法である。

フェアトレード（公正な貿易）とは、貧困に苦しむ途上国の生産者と「適正な価格」で商品取引を持続的に行うものだ。「適正な価格」とは、生産者に、子どもたちの教育費や次の生産への投資などの資金や、環境負荷の少ない生産などにかかるコストを保証できるものをいう。こうして彼らが自分たちの生産活動を通じて自立していくことを支援するのである。そのため商品の販売には生産者や生産現場の情報が付されているのがふつうである。

最近、このフェアトレードの目指すべき到達点についての話を、あるセミナーで聞く機会をえた。それはこれまでの北と南の関係と異なる“南と北の「オルターナティブな関係」の構築”を目指すためであり、その方法がフェアトレードであるという話しであった。これは、フェアトレードの日本での草分け的な存在で、日本ネグロスキャンペーン委員会共同代表の前島宗甫さんのフィリピンでの支援活動の中での「出会いと思考の体験」を通して語られた。前島さんが「物資の支援」から「フェアトレード」へと至ったのは、直接的には1985年に起こったネグロス島での飢餓問題に取り組む中からであった。この飢餓の背景には、アメリカ向けの輸出を主とした砂糖生産のモノカルチャー経済があった。すなわちこれは南の途上国に共通する構造的な飢餓であったのである。緊急支援だけでは解決できない問題であったのだ。

話は変わるが、フード・マイレージ、ウッド・マイレージという言葉がある。食品あるいは木材の輸入量とそれぞれの

輸送距離を掛け合わせたもので、食品や木材の輸入にどれくらいのエネルギーを消費しているかを計算する方法である。もちろん日本はいずれも世界一だそうだ。

また、先日こんな記事を目にした。1日に約60万トン・300万人分以上の食事にあたる食品が売れ残りとして全国のコンビニやスーパーなどの小売店から捨てられているという。「欠品したらお客さんは逃げるんです」と、店主たちは約1割程度を売れる見込みより余分に仕入れている結果だそうだ（『毎日新聞』2005年6月6日朝刊）。これらの捨てられる食品の中にも、おそらく海外から輸入されたものが多く含まれていることであろう。それらの食材がどんな人たちによって、どのように作られたか、私たちはあまり関心がない。

フィリピンのバナナ農園で働く労働者の実態を私たちが知ったのはもう20年も前のことである。安い商品を生み出すために、途上国で児童労働が行われていることも知らないことではない。莫大なエネルギーを消費し、世界中からモノを集め、環境破壊と人権侵害に加担したうえに、大量のゴミをはき出すのが今の私たちの豊かな生活である。

最近、BSE問題などにより、国民の食品の安全性へ関心の高まりから、外食産業にも食材の原産地表示を求める動きがある。いいことだと思うが、もう一歩進みたい。自分たちの安全性だけでなく、作る人たちの安全や環境へ関心や想像力も持つことができないかと思う。

先のセミナーを主催したのは1979年に「インドに井戸を贈る運動」として発足した（社）アジア協会アジア友の会を母体に、1996年にフェアトレードを専門に扱う団体として発足した神戸にあるフェアトレード・サマサマであった。

「サマサマ」、やさしい響きをもった印象的な言葉である。インドネシア語で「お互いさま」「どういたしまして」という意味だそうだ。貧困、飢餓、環境破壊といった地球規模で考えるべき問題に立ち向かうときのキーワードだと思う。

OSIES News 人と環境 No.4 (2005)

大阪信愛環境総合研究所(OSIES)発行(2005年4月)

大阪信愛女学院短期大学鶴見学舎内(〒538-0053 大阪市鶴見区鶴見6-2-28)
TEL06-6180-1041,FAX06-6180-1045,E-mailosies@osaka-shinai.ac.jp

Web page:<http://www.osaka-shinai.ac.jp/osies/>

Contents

P1 環境の時代を考える

P2 2004年度環境総研講座
生命の歴史をたどる

P3 人と環境を考える

P4 「学び」を通じた里山保全活動